

中東現代文学選 ◎ 2021

中東現代文学研究会〔編〕／岡真理〔責任編集〕

ワタンとは何か——《ワタン》を通して人間と現代世界を考える

「ワタン」とはアラビア語で「Homeland」を意味することばです。そこで生まれたか否かを問わず、人がそこで生活を織りなし、自らの「ホーム」とする場のことです。近代以前、先祖や自分が根を下ろし、生を紡いできた土地——ふるさと、故郷、郷里、くに、アラビア語では「バラド」——と重なっていたそれは、やがて近代国民国家の成立とともに、「祖国」をも意味するようになります。ペルシア語をはじめとする中東の諸言語では現在、このアラビア語起源の「ワタン」が「祖国」を意味する語彙として広く用いられています。

アラビア語の「ワタン」は、日本語であれば「故郷」と「祖国」という二つの異なるシニフィアンによって表現される二つの概念が含まれています。生まれ育った郷里としてのワタンと、その外延

がナショナルな境界（国境）にまで拡大した想像の共同体としてのワタン／祖国。そのふたつのワタンのあいだに何らの齟齬や乖離、痛みを覚えることなく、それらを同心円的な拡大として経験できる者たちは、ある意味、恵まれた「幸福」な存在です。そこが自分の祖国であること、自分がその国民であること、それを自明のものとして、その共同性のなかに安住することができる者たちだからです。しかし、近現代の、中東に限らず、世界の人間の歴史は、それがむしろ例外的で、特権的な経験であることを物語っています。

近代の植民地主義によって、植民地支配下に置かれた人々は、自らのワタン（郷里／故国）にいながらにしてワタン（祖国）を奪われました。物理的にワタンを追われ、エグザイルとなった者たちもいます。あるいは独裁体制のもと

で、人間のホームであるべき祖国それ自体が、巨大な監獄と化している場合もあります。さらに、難民や移民など人間の生の経験が地球規模で国境横断的に生起する現代世界においては、人間はワタンとますます多様に、痛みを満ちた

関係を切り結んでいます。人間とワタン／ホームランドの関係性がどのような形で現象しているか、その表象を通して、それぞれの社会のありようと、現代に生きる人間の生の実存と現代世界そのものの姿が見えてきます。

そのような問題意識から、中東現代文学研究者が中心となり、二〇一二年度より、中東現代文学や現代中東文化における「ワタン」表象をテーマとする研究プロジェクトを継続してきました。プロジェクトを継続してきました。プロジェクト三期目の現在は、「トランスナショナル時代の人間と「祖国」の関係性をめぐる人文学的

領域横断的研究」と題し、対象地域を地球規模に拡大、中東を中心に世界の諸地域を専門とする人文研究者が協働し、文学や映画、音楽など多様な「ワタン」表象の分析に取り組んでいます。

ネイションを所与と見なし、その同一性に収まらぬ者たちを排除するレイシズムや排外主義が世界を席卷するなか、本研究プロジェクトは、現代世界において人間がワタン（祖国／故郷）をいかなるものとして生きているか、その考究を通して、ネイションや地域を超越して人間の経験をグローバルに貫く普遍的な課題とは何かを明らかにし、新たな人間解放の思想を創出するための基盤づくりに貢献したいと考えています。

プロジェクト代表

岡 真理

刊行にあたって

二〇〇八年、トルコ、イラン、アラブの現代文学にかかわる、日本の中東現代文学研究者が集まり、中東現代文学研究会（M M E L）が発足しました。以来、毎年、一月と六月に、それぞれ東京と京都を会場に研究例会を重ねてきました。

「中東」は、東はアフガニスタンから、西は北アフリカの西サハラ、モリタニアまで、三大陸にまたがる広大な世界です。二十五以上の国があり、言語も社会も歴史も国や地域によって大きく異なります。そうした地域的な多様性を反映し、中東現代文学のありようも実に多種多様です。しかし、その多様性を貫いてあるのが、「ワタン」というモチーフです。この点に着目し、二〇一二年度からM M E Lを研究母体に、「ワタン」をテーマとする研究プロジェクトが始まりました。今日まで三期一〇年にわたり継続的に取り組んでいます。

その基礎資料として、プロジェクト第Ⅰ期に『中東現代文学選2012』を、第Ⅱ期に『同2016』を刊行しました。本文学選も現在遂行中の、「トランスナショナル時代の人間と「祖国」の関係性をめぐる人文学的、領域横断的研究」を課題とするプロジェクト第Ⅲ期の共同研究の基礎資料として供すべく科研費で制作されました。

先に刊行された『2012』と『2016』の文学選においても、植民地主義の歴史や移民経験を反映したフランス語やスペイン語、ドイツ語による作品が収録されており、中東現代文学が、ペルシア語、トルコ語、アラビア語といった中東の言語によって著される文学の枠をはみ出るのであることは示唆されていますが、二九人の作家の三四の作品を収録した本文学選では、中東現代文学のグローバルな性格がより明瞭に示されることとなりました。

多様な言語、多様な地域の作品をどのように配列するかは、毎回、頭を悩ませる問題です。『2012』では地中海を囲んで旧ユーゴを起点に時計回りを採用、『2016』ではユーラシア大陸を東から西へ

移動としましたが、今回は地域も四大陸にまたがり、作家の出自も言語もこれまで以上に多様を極めました。悩んだ末、中東出身の作家が中東の言語で書いた、いわばオーソドックスな「中東文学」と、そこからのみ出る作品グループ（中東地域以外の土地で、中東諸語以外の言語で、中東以外の地域にルーツをもつ作家によって……など）の二つに大別し、前者を「ローカル編」とし本書の後半部分に、後者を「世界編」として本書前半に置き（マダグレブ諸国の公用語であるフランス語によるマダグレブ文学は「ローカル編」に分類）、それぞれユーラシア大陸の東から西への順番に作品を配置することにしました。

その結果、巻頭を飾るのは、金友子さん訳、李真恵さん解説による、旧ソ連邦カザフスタンの高麗人の作家による朝鮮語の作品です。さらに、スペイン人植民者出身の作家が西サハラというワタンで過ごした子供時代の思い出を綴ったスペイン語のエッセイ、レバノン系コロンビア人作家による、移民一世の老人がワタンたるベイルートを回顧するさまを描いたスペイン語の短編をはじめ、イタリア在住のソマリ人作家によるイタリア語作品、ドイツ在住のイラク出身のクルド人作家によるドイツ語作品、アメリカを舞台にしたトルコ系作家による英語作品、パレスチナ系アラブ・アメリカンの詩人による英語作品などなど、世界のさまざまな地域で、中東を出自とする作家やそうでない作家によってさまざまな言語によって著された作品を「中東現代文学」として紹介しています。これら、中東現代文学における地域と作家の出自と言語の輻輳する関係性は、そのまま中東世界の多様性の表出であると同時に、現代世界における人間とワタンのあいだの多様かつ複雑な関係性のありようを示していると言えます。

「ローカル編」の冒頭は、野中葉さん訳によるインドネシアの作品です。東南アジアに位置するインドネシアは中東ではありませんが、M M E L 発足時から、本研究会では中東地域だけでなく、中東に隣接する地域や広くイスラーム圏の文学作品も対象にしていきたいと考えていました。今回、本書にインドネシアの文学作品を収めることができ、たいへん嬉しく思います。

「世界編」「ローカル編」とともに扉ページには地図をあしらい、作家のルーツがある地と現在の居住地を二本の線で表しました。「世界編」のそれぞれの作品が、地理的に離れた二つの地点を二本の線で結ぶことになるのは当然ですが、「ローカル編」に登場する作家たちの中にも、自らのワタンとは異なる土地に居住している者が少なくないことが、この地図から分かります。異郷に身を置きながら故国の言語で著述しているエグザイルの作家たちです。そこでもまた、ワタンとの痛みに満ちた関係が想像されます。

今回もまた、浩瀚な文学選を編むことができたのは、作品を翻訳し解説を執筆して、興味深い作品の数々を提供してくださったみなさんのおかげです。本文学選に参加していただきました翻訳者・解説者のみなさまに深く御礼申し上げます。また、『2016』に続いて、装丁、レイアウトを担当していただき、本書の編集作業に伴走してくださいましたプラメイクの呉玲奈さん、松村紗恵さんのご尽力にも心より感謝申し上げます。原稿やゲラのチェックは、プロジェクト・アシスタントの渡邊円香さんと西道奎さんが担ってくださいました。お二人の協力なくして本書の完成は不可能でした。とくに渡邊さんのご尽力には感謝の念が尽きません。本書の刊行を可能にしたすべてのみなさまのご協力に対して、深く御礼申し上げます。

本文学選を通して、中東世界とその人々の存在が少しでも読者のみなさまに身近なものとなれば幸いです。